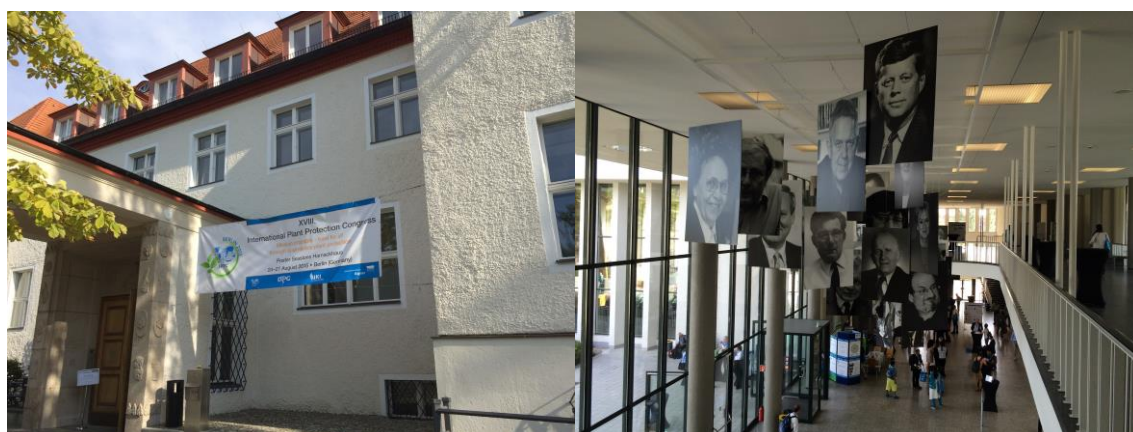


第18回国際植物保護会議報告

福井県立大学 生物資源開発研究センター
プロジェクト研究員 草島美幸

植物保護会議（International plant protection congress; IPPC）は2015年8月24日～27日の4日間ドイツのベルリン自由大学にて開催された。日本からは直行便が無いので、小松・羽田・フランクフルトを経由してベルリンに向かい、ベルリン市の中心部から電車で20分ほど乗ってベルリン自由大学に到着した。日本は35°C近い真夏であったのに対し、ベルリンは肌寒さを感じる気温であり体に少し応えた。

IPPCは植物保護科学会（IAPPS）とドイツの植物病理学会（DPG）、Julius Kuhn 研究所（JKI）、ドイツ植物保護・病害虫制御・肥料協会（IVA）が開催し、持続可能な植物保護方法のデザインを通じて、農家、政府、および植物保護科学者が直面している重要な問題の解決を目的とした。また、95以上の国々から1200名を越える参加者があり、非常に大規模な会議であった。発表のテーマは線虫、ウイルス、ポストハーベスト、雑草、害虫、農薬など非常に多岐にわたり、日本国内の植物病理学会では触れる機会が少ない分野についても知見を広げることができた。また、人口増加、気候変動に応じた食糧の安定生産に対する植物保護の重要性について強く論じられていた。気候変動に対する植物の状態変化とともに、病原菌、雑草の生育に対する影響が報告されており、様々な視点の研究者の協力が今後の植物保護には重要であると思われ、また私自身も広い視野が必要であると強く感じた。



(写真) ポスター会場（左）、口頭発表会場の Henry Ford Building（右）

私は『Studies on mechanism of high temperature-induced disease resistance in *Arabidopsis*』と題したポスターにて、モデル植物であるシロイヌナズナにおける高温ストレスが誘導する病害抵抗性機構について発表を行った。発表申し込み時の2月には来年度の予算の目処が無く、自費での参加を覚悟していたため、報農会の渡航費援助の制度に助けられたことを感謝申し上げる。ポスターの質疑応答時には東南アジアの研究者と、高温ストレスを利用した病害抵抗性の有用性、他の植物種への応用について意見交換した。施設栽培では、新たな資材を導入することなく、病原菌および害虫の防除に効果的である可能性に興味を持ってもらえた様であった。

ポスター会場全体としては基礎的な発表も見られたが、応用的な圃場データを中心としたものが多い印象だった。また、ポスターが貼られていない場所も多く、残念だった。紙のポスター以外にも液晶画面を用いたポスター検索・閲覧が可能な E-Poster も導入されていたが、会議の少し前にアナウンスがあったため、全てのポスターを閲覧できる状態では無かった様である。当日もポスターデータを受け付けてもらえると良かったかもしれない。

最後に、はじめての IPPC 参加を補助していただいた報農会、特に監事の上山氏には申請および IPPC の会場でもお世話になり、御礼申し上げたい。報農会の国際交流に対する援助金制度は植物防疫に関する学会参加を広く援助されていることを今回初めて知り、予算の少ない若手研究者として有難く思った。



(写真) 懇親会会場であった付属植物園の温室